松田憲秀の内応説　2019 年 7 月 4 日

戦国時代は下克上の世の中で、生き延びる為、家族・家臣・領地を守る為に必死で生きた時代である。信長は尾張守護・斯波氏を裏切り、家康は今川氏を、秀吉も最初は今川氏に、次に織田氏に仕え、信長の死後は世継ぎ候補を殺し、追い落とし、織田氏を乗っ取っている。それぞれ離反して、のし上がった。全ての価値が混乱し、乱れた乱世であった。

当時は人を裏切ることは現代人が考えるほど卑怯な事では無かった。江戸時代になると君臣の別を重く見る朱子学は幕府体制を維持するのに役立つので、公式学問のようになっていった。「甲陽軍艦」・「信長公記」等は、朱子学の影響が広まる前のものなので、「謀反」を悪とする倫理がまだそれ程強く無い。また、我々の知る歴史は勝者の立場で書き残されたものが殆どなので、統治する者の側に立った英雄伝である。
敗者には反論が出来ないまま語り継がれてしまっているので、我々の知る歴史は全てが真実とは限らない。

また、内応工作はどこの大名もしていた事で、敵の勢力下で諜報活動や攪乱工作を行い、味方が有利になる様に画策した。その様な時代なので憲秀が内応したとしても不思議では無いが、次の 5 つの理由で憲秀の内応は無かったと考える。

まず最初の理由：

松田憲秀内応説は、「北条五代記」や「小田原北条記」が元になって世間に広がったものである。「北条五代記」「小田原北条記」は史実を忠実に著したものでは無く、内容は逸話を集めたもので、諸事聞きかじりと小説の様に事実で無い事も書き加えた江戸時代の戦記物語である。歴史書としてはあまり評価の高くない書物で、読者の興味をそそるように再編した作品であり、「小田原北条記」を元に後世の書物に記録したものが史実の様になっていった。「小田原北条記」の元と考えられる内応と思わせる文書も残っているが、調査をしたが、これは秀吉の城内の人心を撹乱させる戦略的偽文書や噂を真に受けた者が作文をしたものであった。これらからは憲秀が内応の当事者とは特定は出来ない。なを、不名誉な密会の様子を当事者が公にこの様に細かく話をするであろうか。「講釈師見て来た様な嘘をつき」の例えも有る。後日内通の密会に出席していたとされる参加者は養子の笠原新六郎を除き、前田氏・結城氏・徳川氏に高禄で召し抱えられている。笠原新六郎については別説があり、直木賞作家新田次郎氏は当時の「武田氏は力が無く、織田・徳川が攻めて来た時に武田氏を少しでも長持ちさせる為に氏政と憲秀の考えで新六郎を武田に寝返りさせたのであろう」と書いている。三島市の蔵六寺の寺伝によると笠原新六郎が僧になって蔵六寺を開山し 1626 年迄生きていたとの事である。「北条記」「相州兵乱記」「北条盛衰記」「北条五代記」などは歴史書では無く、江戸時代の戦記物(物語本)を元に述べられた事は次の事でも証明できる。北条早雲の出自について「北条記」と「相州兵乱記」は伊勢素浪人説を記載し、「北条五代記」・「北条盛衰記」は山城宇治説を記載している。北条早雲の出自は室町幕府の政所執事を務めた伊勢氏で、伊勢氏のうちで備中国に居住した支流で伊勢新九郎盛時であり、備中荏原荘(井原市)で生まれ、荏原荘の半分を領する領主(300 貫)である。北条早雲は文明 15 年(1483 年)に 9 代将軍足利義尚の申次衆に任命されており、長享元年(1487 年)奉公衆となる。松田頼重と北条早雲とは足利将軍の近く
で同じ奉公衆であった。

松田憲秀は豊臣秀吉の小田原攻めの時、当初徹底抗戦を主張していたが、豊臣秀吉の軍が職業軍人22万の大軍であり、北条軍は半農半士も含めた5万人、徳川家康も敵に付いたと見るや評定では松田憲秀、北条氏規は籠城策を主張し、これに対し北条氏照、北条氏邦、伊勢貞運は無謀な野戦を主張した。

憲秀が籠城策を主張したのは以前上杉謙信や武田信玄に攻められた時にも籠城策で成功した実績があり、22万の大軍では長くは物資が賄えないだろうとの目論見があったが、秀吉軍は物量も豊富であった。この評定は約3ヶ月も続くが、結論としては籠城策が採られ続けられた。結果的に戦いが避けられた事は両軍共何万人という死傷者を出さずに済んだ。これは松田憲秀、北条氏規の意見で籠城策を続けた最大の功績である。松田憲秀の失敗は前田利家・堀秀政と戦後処理に就いての駆け引きを独自に行っていた事である。それは憲秀が長老として若い氏政・氏直を補佐しなければならないという、北条氏を存続させる為の忠義と誇りの方策であり、松田憲秀が抱えた苦衷は大きかったと思う。その為に誤解も生むが、北条氏の安泰を念じていた憲秀は秀吉からの誘いには最後までのらず、城門を開ける事は無かった。北条方は今まで見た事の無い瓦葺で石垣の立派な石垣山一夜城を見せられ、又城内の内部分裂を謀る戦術的な噂の吹聴や偽文書などによって城内の人心は撹乱され、秀吉の攪乱戦術に北条方はまんまとはまり、開城となるのである。
その結果秀吉の誘いにも乗らず、当初徹底抗戦を主張していた事、北条氏再起への恐れもあって憲秀は切腹となった。

なを、この当時の事が郷土史家の中野敬次郎氏に依って次の様に書かれている。「天正十八年(1590)小田原戦役の北条軍籠城中に、家老松田尾張守憲秀が敵方に内応して反逆を企てたので誅殺された事件は、小田原落城悲劇中の大詰の一場面として有名であるが、松田尾張守とはどんな人物なのか、その謀判の真相はどうなのか、此の事については従来疑問とされた点が頗る多いのである。(中略)北条氏康は寛仁大度の名将で、その赫々たる武徳はよく家臣をなづけ、条理を正し、裁断厳正であったので、威令関八州に行なわれた。憲秀はもとより才幹衆に優れた人物で、権勢あっても、これ独り計弄することなく、家老として忠勤を励み、各地の戦場でも抜群の勲功をあげて、氏康からも他界篤い信頼を受けていたのである。松田一族は、早雲以来、主家北条家の為に惜しみなき忠勤を励んだ家柄で、其の為権勢も増大したが、とにかく元亀二年(1571)氏康が世を去って氏政の時代に入ったが、氏政は氏康程の大器ではなく、残念ながら人心集欖の資に欠けており、むしろ憎愛の念が強かったので、家臣の間に相当の動揺を与える事が有り、松田憲秀一家もそのあおりを喰ったものの一つである。」と記述している。以上が憲秀の内応は無かったと云う最初の理由である。

<u>2つ目の理由は、</u>3か月経っても城門は開かなかった。もし、内応をしていればもっと早くに城門を開けていた筈である。秀吉はイライラしており、何度も城門を開けるように要求が来ていた筈である。22万もの大軍を抱えて楽に待てる筈は無く、当時日本に来ていたポルトガル人のルイスフロイスの書いた「日本史」によると北条氏の籠城がもう少し長引けば秀吉軍は撤退しただろうと書いている。しかし、北条軍は石垣の積まれた瓦葺の一夜城を見せられ、八王子城で討ち死にした老将狩野一庵ら大勢の首が小田原城中に届き、小田原城内では松田憲秀内応との戦略的噂を流し、籠城軍の戦意を喪失させた。これらに依って開城となるのである。

3つ目の理由は、北条氏滅亡後、直秀は家来筆頭として氏直公と共に高野山に追放されるが、直秀が高野山で発行した文書に尊敬していた父憲秀の「憲」の文字を自分の名に使用し、直憲と改名した。天正十九年(1591)五月十一日と七月十八日に松田直憲書状を残している。憲秀の「憲」を高野山にいる内に使用するという事は内応が無かった証拠である。内応が有れば氏直公や周りの人々に憚って(はばかって)「憲」の文字など使用出来ない筈である。又、随行した約30人の家臣達や他の随員300人の人々も黙っていなかったであろう。

4つ目の理由は、

この当時、前田利家と徳川家康の力が拮抗しており、前田氏と徳川氏が戦いになった時に関東の北条氏の旧勢力を前田氏に確保したい目論見があった為に4000石の高禄で加賀前田氏が松田直秀を召し抱えたのである。松田憲秀に内応があったとすれば、裏切り者の跡取りに付いて来る者は一人も有り得ない。北条氏の旧勢力を纏める事を直秀に期待して前田氏が召し抱えたのである。

「加賀藩資料『寸錦雑編』」に前田利家公談話と云う記述が有り、

「松田四郎左衛門(直秀)を加賀前田氏が召抱えた理由」が記載されている。

加賀藩資料『寸錦雑編』に依ると「利家公は利長公に対して「内府(徳川家康)と我らは必ずや敵対関係になるのは必定であろう。その時関東は先主である北条を忘れぬ国であり、義理深い国であるから、かの北条を押し立て、その方(利長)に属する松田四郎左衛門に関東で旗を挙げさせたならば、たちまちの内に関東の八カ国は我らに味方するであろう」と言った。と記述されている。

5つ目の理由は,

その後、憲秀の子の直秀は前田氏に召し抱えられた時に四郎左衛門憲貞と改名した。また子供達にも憲成・憲次と「憲」の文字を使用し、明治時代迄子孫達も22名中21名が憲秀の「憲」又は「郷」の文字を使用している。「郷」は憲秀の別名憲郷の「郷」である。内応が有り、松田の名を辱めたのであれば子孫達も憲秀の文字を使用する事は有り得ない。子孫達全員が憲秀を尊敬していたと云う証拠である。以上5つの理由で憲秀の内応説は事実では無かったのである。

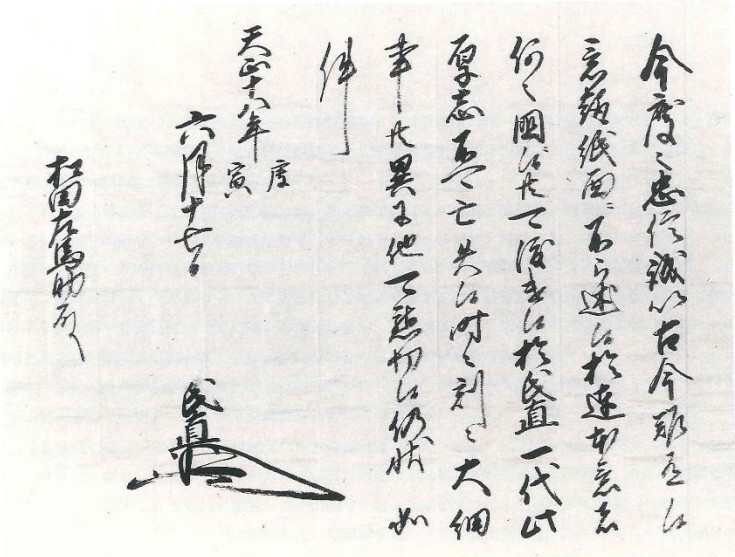
NHK大河ドラマの時代考証をされ、戦国時代史研究の第一人者として活躍されている、静岡大学名誉教授**小和田哲男氏**から次の様な手紙を頂いた。【御先祖のこと、くわしくお調べになり、関係する地に足を運ばれていること、頭が下がります「松田家の歴史」の中で一番気になったのは、憲秀のご子孫が憲の字を付けておられる点でした。普通ならば、謀判人は嫌いますので、つけないと思います。むしろ触れないようにしたいと考えるのではないでしょうか。そうなるとご子孫の間には、通説とは異なる受け止め方をしていた事が伺われ、私はその点に興味を持ちました。さて、その憲秀謀判の一件ですが、私は、秀吉からの誘いに乗ろうとしたのは事実だったと考えています。しかし、それは、主家北条家に対する謀判と云うよりは、北条家の存続を考えた行動だと見ています。結果的には謀判(内通)が露顕し、失敗したため主家を裏切った悪人のイメージで語られますが、これはよくいう「歴史は勝者が書いた勝者の歴史」になっています。恐々謹言】と述べられています。

松田憲秀内応説についての高村不期氏の説

松田憲秀の裏切りは裏づけがあるか

既に秀吉の大軍に攻囲され、分国内の支城も次々に陥落していた状況である。徳川家康も敵方に付き、陸奥の伊達政宗も恭順し、籠城している北条方は、日本全土を敵に回して孤立していた。通説では、重臣の松田憲秀とその長男の政晴が「これでは勝てない」と敵を城内に引き入れる計画を立て、羽柴秀吉から伊豆・相模をもらう約束を取り付けたという。実行の直前で、政晴の弟である直秀が氏政・氏直に報告し、憲秀・政晴は捕縛。事なきを得たとする。ところが、「北条氏直判物」を見て、何故文章が曖昧なのか、何か意味があるのではないかと考えた。

「北条氏直判物」（北条氏直感状）



「北条氏直判物」

天正十八年(1590)六月十七日　北条氏直、松田直秀の忠節を賞す

北条氏直感状

懸紙ウハ書

「松田左馬助殿」

今度之忠信、誠以古今難有候、」意趣紙面二不被述候、
於達本意者、」何之国二候共可渡遣候、於氏直一代此」
厚志不可亡失候、時々刻々大細」事共、異于他可懇切候、
仍状　如」件、

天正十八年庚寅

六月十七日　　氏直（花押）

松田左馬助殿

(読み下し)「この度の忠信、本当に古今ないことです。内容は紙に書かれません。本意を達したら、どの国でも(知行を)お渡しします。氏直一代において、この厚志は忘れません。時間が経とうとも些細なことでも、他とは異なり親しくします」松田左馬助殿

(解説)

実に模糊とした内容である。反乱が多数見られる今川家であれば、こんな曖昧な言い方はしていない。今川家であれば、次の様になる筈である。

「今度福島彦次郎構逆心、各親類・同心以下令同意処、存代々奉公之忠信、
最前馳参之条、甚以粉骨之至也」

また、「内容は紙に書かれません」の部分の原文も少し違和感がある。通常であれば「難尽紙面候」と書くものを「紙面不被述候」としている。**「書きつくせない」ではなく、「書くに書けない」**という意味が込められているようだ。

直秀が自ら主犯となって罪をかぶり、北条氏直をかばった可能性が考えられる。氏直の祖母・義母の死、側近の拘禁を受けてなお氏直が活動できたのは、直秀が隠せる部分は隠し通したからとしか思えない。口を割らなかったからこそ氏直の開城工作は続けられ、開城となった。

憲秀の内応を直秀が告発したと言われて来たが、直秀を直長が告発したものと考える。北条氏直の妻は徳川家康の娘であり、家康から情報が入って来ても不思議では無い。氏照と氏政が一番鋭く豊臣との決戦を主張し、氏直や氏規等は家康を通した和平を望んでおり、氏直が主戦派の氏政や氏照に内緒で行っていた開城工作を氏政・氏照らが気付き、氏直の近辺を調べ上げたに違いない。そうした中、16 日に松田の弟の証言によって状況が判明し、告発された「松田」は拘束される。

この時の様子を城外から見たのが家忠日記の 6 月 16 日項である。

（冒頭に挙げた奇妙な氏直書状は翌日の 17 日の日付）。

「城中ニ松田調儀候へ共、弟返忠候てちかい候、松田成敗ニあい候由候」

「松田成敗」とあるが、これが即座に死刑を表わすことは限らず、『処罰』を指すケースが多い。「松田」は拘禁された可能性が高いように思う。

そして、直前までの北条氏直の動きを見る限り、「松田」が単独で動いていたとは考えにくく、氏直の指示で開城工作を行なっていたと考えた方が自然である。氏直こそが調儀の主役だった。氏直に忠節を尽くしていたのが直秀である。その為、感状には「紙面不被述候」としている。「書きつくせない」ではなく、「書くに書けない」という意味が込められている。事情を知る氏直があの奇妙な感状を送ったと考えると、曖昧な文章にも合点がいく。氏直が直秀に宛てた感状を改めて見てみると、氏直の身代わりとなって軟禁されていた直秀に「事情は判っている。恩に着る」と告げたかったように解釈が導き出される。

憲秀が「松田」だった場合、弟ではなく息子に告発されたことになり、直秀への感状も、氏直から明確に忠節を賞されたものになる筈である。従って、この感状の内容からは「松田」は直秀であり、弟とは直長である。そして調儀の主役は北条氏直であった。

直長は 28 歳で、直秀の又従兄弟ではあるものの「弟格」にはなるだろう。父康長の率いた兵は山中城で失っているから余力はなかったはずで、本家の直秀に陣借していた可能性が高く、その動向を見知っていただろう。

直長の心情を考えると、兵力差から到底勝てぬと判っていながら最前線に立って死んだ父がいて、その一方で、堂々と開城交渉をするでもなく、秘密裏に工作している氏直・直秀がいる。父の壮絶な死を茶番の前座にしないためには、告発は当然の流れだったのだろう。

一方、小田原合戦後の直長はどうかというと、氏直らとは完全に別行動をとっていた。文禄 4 年(1595)に徳川家康旗本となり父の知行である相模国荻野郷を給されている。後北条時代の本領が安堵されたのは珍しく、父の奮戦と自身の内応阻止が評価されたのではないかと思う。

氏直は 4 月下旬頃から、直秀に出していたと同じ様な感状を上田氏、木呂子氏、林氏に対して駿河、上野、甲斐を与えるので頑張るようにとの内容で出している。この他にも多数の同様の感状を出していたとの予測が出来る。

4 月 26 日　氏直が木呂子氏に、戦勝後は駿河・上野の知行を与えると約束
4 月 29 日　氏直が上田氏に、戦勝後は駿河・甲斐の知行を与えると約束
6 月 01 日　氏直が林氏に、戦勝後は駿河・上野の知行を与えると約束
「其書状写」（古今消息集六）
「芳翰并御使者口上之趣、即殿下へ令披露処、尤忠節之段、悦思召候、然ハ伊豆相摸、永代可被扶助旨候、弥被極御分別、重而誓紙等之儀、委御沙汰候て、頓而可被仰越候、恐惶謹言、
六月八日
後筆：北条家老松田尾張守政賢反逆ニテ秀吉へ内通ノ答、態タガヒノ名字ナカリシト云ゝ」
「ご書状とご使者の口上の内容、すぐに殿下へ披露いたしましたところ、もっともな忠節であるとお喜びになりました。ということで伊豆・相模は末永く扶助されるとのことです。ますますご分別を極められ、重ねて誓紙などのことを詳しくご処理いただき、すぐに仰せになるでしょう」
　この文書は差出人と宛名が失われており、従来は羽柴秀吉から松田憲秀に宛てられたものと解釈されてきた。しかし、家臣筆頭とはいえ 2 カ国を得るような約束を憲秀が得られるものだろうか。ちょうどこの頃の氏直は開城に向けて邁進している点からも、これは氏直が得たお墨付きだと考えるのが自然であり、「後筆」の内容は誤りである。
しかし、この開城交渉は内々で行なわれたため難航する。岡田利世(織田信雄家臣)が「氏直様御壱人」としか話していなかったと証言しているように、その席に氏政・氏照らはいなかった。だからといって厳密に秘した訳でもない。氏直は信定に開城のことを縷々告げており、4 日後の 12 日には以下の状況になっている。
「北条氏直覚書写」（東京都目黒区尊経閣所蔵小幡文書）
「覚。一、扱之様子之事。一、扱之取沙汰ニ付而、諸役所油断之由候、改而堅固之仕置肝要候。以上、
六月十二日
［貼紙］「調」朱印
小幡兵衛尉殿」
「覚書。一、和睦交渉の状況のこと。一、和睦の噂について諸部隊が油断しているとのこと。改めて堅固(けんご)な指示を出すのが大切なこと。以上」
このように城内で変な噂が出回っていたというが、その日に氏政の母と妻が亡くなる事件が発生する。同日ということから自害したと考えられているが恐らく彼女たちは氏直の近くにいてその動きを察知し、諫死したと思われる。ここに来て、城内各所にいた氏政・氏照らは異変に気づき、彼らは氏直の近辺を調べ上げたに違いない。そうした中、16 日に松田の弟の証言によって状況が判明し、告発された松田は拘束される。（岡田利世を城内に手引きした垰和善七郎（豊繁）も拘束されたものと思われる）
以上をまとめると、城内で極秘に開城工作を進める氏直は、情報を祖母と継母に知られてしまい、彼女たちの自害を招いてしまう。そして側近の直秀を、従兄弟の直長が告発し直秀は拘禁される。黙秘を続ける直秀に氏直は感謝の書状を送りつつ、開城へ向けて準備を進め、ついに滝川雄利の陣所に駆け込んだ。
　また、余湖浩一氏は『北条五代記』や『北条記』などについて疑問点を多数記述している。

一例を挙げると次のようである。

「三増峠の戦いのおかしなところ」

北条軍が武田と戦い大敗した三増峠の戦いの記述でも、「五代記」では、北条の先陣が武田軍に破れただけで、その後北条氏康・氏政がやっと先陣に到着したが、すでに武田軍は相手になることをせずに退いていったというように記述してある。氏康が戦えば北条軍が当然勝ったはずなのに、武田が戦わずに去っていったと言わんばかりの内容である。この戦いについても、本当に氏康が直接参加して敗軍していないのかどうか、検討の余地があるように思われる。（確かにこれと同じことは史料の上からも見ることができる。（「相武境三増山地迄進軍候、敵手早取越間、当旗本一日之遅〃故、取遁候」（上杉謙信宛の北条氏康書状・戦 1321）　一方、同時期の氏照書状では「武田の兵をさんざん討ち取ったが、信玄一人を討ち漏らしたのが残念」（敵押崩、宗之者数多討取候キ・・・・・今般信玄不討留事、無念千萬ニ候（河田伯耆守宛て北条氏照書状・戦 1325）といかにも圧勝したかのように書いてある。この戦いは実際は武田が勝利しているのだが、書状はそれを伝えてはいない。書状は一級史料とはいえ、自分に都合よく書かれているので、そのまま信用できない面もある。）

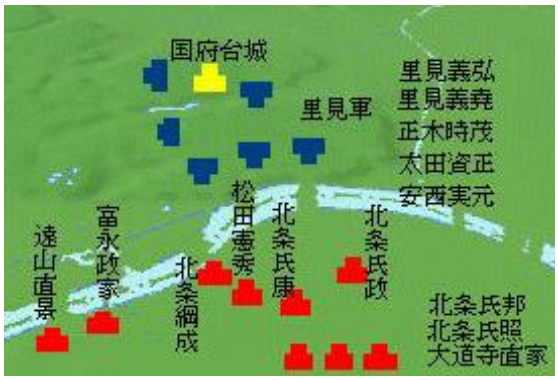
「川越夜戦と国府台の合戦のおかしなところ」

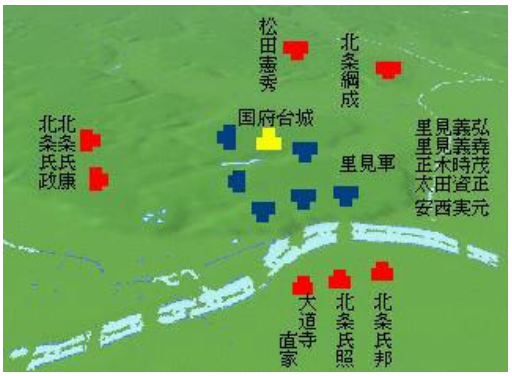
「北条五代記」ではこの戦いを天文 15 年 4 月 20 日のこととしているのに対して、

「北条記」は天文 13 年 4 月 20 日のこととしている。日付こそは同じだが、年号が違っている。この 2 つは代表的なものであるが、これ以外の諸書においても、他の日付を用いているものがあって、どれを信用すべきなのか迷ってしまうという一面がある。これだけの大きな合戦の日時について、このように多くの異説があるというのはおかしな話である。

また、川越夜戦は、北条氏康が、わずか 8000 の兵で、関東管領上杉氏らの 8 万の大軍を破り、それにより関東での北条方の勢力伸張を決定付けることになったという実に歴史的な一戦である。しかし、この軍さに関する感状が 1 通も残っていないことから、真実、そのような戦いがあったのかどうか疑問視されている面もある。合戦の期日も軍記物によってまちまちである。実際のところ、2 回あった国府台の合戦を 1 度にまとめて、北条方が大勝利した一度の軍というように編集しなおしたのと同様に、川越の合戦も、本当は何度かあった合戦を、北条氏康のすばらしい軍略を際立たせるために、一度の戦いに編集しなおしているかもしれない。

国府台合戦図





童門冬二著『名補佐役の条件』より一部を抜粋

童門冬二氏は歴史小説家、本名太田久行氏、東京都企画調整局長、政策室長などを歴任し、1979 年に作家として独立。第 43 回芥川賞候補、勲三等瑞宝章受章。

松田憲秀～小田原評定を
主人の北条氏直とともに演出したナンバー2

豊臣秀吉の小田原攻め：

・・・秀吉に標的とされた北条氏は、当時五代目の当主氏直がそのトップに立っていた。彼は、19 歳で父氏政から家を譲られた。秀吉にターゲットとされた天正 15 年には、彼は 26 歳だった。そして、そのナンバー2 として補佐役の筆頭を務めていたのが松田憲秀である。

小田原評定と松田憲秀の意見：

北条側でも、どう対応すべきかを、小田原城ですぐ会議を開いた。天正 18 年（1590）1 月 20 日のことである。その 10 日前に、豊臣軍は動員を完了していた。小田原城に集まったのは、当主の北条氏直を中心に、後見役としての父の氏政、そして一門の北条氏照、氏邦、氏規、氏忠、氏尭などがズラリと並んだ。これに一族の太田氏が脇に座る。そして、筆頭家老の松田憲秀などナンバー2 がズラリと控えた。

一門の中では、北条氏邦が主戦論者であった。籠城するのではなく、城を出て堂堂と東海道で豊臣軍と戦おうということだ。・・・

これに対して、

「わたくしは、反対です」と手をあげたのが松田憲秀であった。みんな変な顔をした。というのは、その座にいた者のほとんどが、北条氏邦の作戦を良策だと考えたからだ。どよめきが起こった。全員が半ばとがめるような視線を集中させるのに対して、松田憲秀はそれを平然と受けとめながら、こういった。

「箱根の山を敵が越えることはできないと思います。また敵は、攻撃軍を各地方に分散しています。まとまりがありません。同時に、いま氏直公が仰せられたように敵は烏合の衆で、忠誠心という点においては当北条家にかないません。また、戦線が各方面に長く伸びているので、やがては敵は兵糧や弾薬が欠乏いたします。それに対して当小田原城には、数年間籠城してもひとつも困らないほどの兵糧や弾薬があります。この際は、韮山と山中のふたつの城を前線として、各部将はそれぞれ自分の城を守る方法を取るべきだと思います」・・

この松田の案に対して、その座にいた人々は動揺した。つまり、はじめからぐらついていたのである。というのも、大将の北条氏直自身がぐらついていたのだ。この会議の前に、松田は氏直とふたりだけの秘密会議を持った。そして、「天下の空気をよくご覧ください。日本は、すでに豊臣秀吉のものです。これに逆らうことはできません。その証拠に、あなたの岳父の徳川殿も、すでに小田原を見捨てて秀吉殿のもとに走ったではありませんか。しかも、今度は攻撃軍の先鋒に立っています。以前なら秀吉様と和を講ずべき時期があったかも知れませんが、いまさらそれをいってもはじまりません。このうえは城を守れるだけ守り、攻撃に手を焼いた豊臣軍が、和を申し出てくるのを待つべきです。そして、北条氏を高く売りつけ、有利な条件で講和するのが最も良い策だと思います。小田原城を捨てて、討って出るなどというのは下の下です」そういうことを吹き込んでいた。氏直は、松田のいうことにも一理あると思っていた。彼もまた徳川家康からいろいろな情報を得ていたから、ここでがんば

ってみても、結局、豊臣秀吉は小田原城を落城させるであろうという嫌な予感を持っていた。それなら、確かに松田のいうように、がんばれるだけがんばって、チャンスを見て有利な条件で講和したほうがいいかも知れない、と考えていた。そういう考えが心の底にあるものだから、どうしても決断が下せないのである。
会議はずいぶん長びいたが、結局、まず後見人の北条氏政が松田を支持した。そこで氏直も、決断した．「作戦は、籠城と決定する。韮山、山中の両城の守りを固め、各部将はそれぞれ自分の城に戻って応戦してくれ」いっせいに「オォ！」という声はあがらなかった。受け取り方がマチマチだったからである。その意味では、すでに豊臣軍のほうがそういうことも含めて、北条一門が一枚岩になっていないということを見抜いていたのは、正しかった。しかし、松田憲秀は、なぜ積極作戦に反対したのだろうか。このときの彼の態度から、「松田はすでに秀吉から手を伸ばされ、北条氏を裏切っていた」といわれる。
　このへんの裏切り者への評価というのはむずかしい。裏切り者といって一蹴してしまうのはたやすいが、やはり大名家というのは、「家の存続と、そこで働いている人たちの生活の安定」ということを考えないわけにはいかない。いくらトップやトップの一族が悲壮な決意をして気勢をあげても、部下の全員がそれについていくかどうかわからない。まして、下層の人間ほど生活不安を持っている。無益な戦いをやめて、いままで通りの給与がもらえるなら、そのほうがいいと考える者もいる。トップの北条氏直も、そのへんのことは十分心得ていた。松田がいう通りだろうと思った。「たとえ局地戦で豊臣軍に勝ったとしても、秀吉様は絶対にあきらめません。必ず、また来ます。そのときは、さらに大軍となって、こちら側はメチャメチャにやられるでしょう。制裁はひどくきびしいものになると思います」このへんは、伊達政宗に対して伊達成実が、「豊臣軍と戦うべきです」といったのに、片倉景綱が、「いや、ハエはうるさいものですぞ」といったのと同じだ。つまり、片倉景綱にしろ、松田憲秀にしろ、このころはすでに豊臣秀吉の実力を知って、とうていかなわないということをわきまえていたのである。時代はすでに豊臣秀吉のものであった。それが、いわゆる時代の空気であり、また潮流な
のだ。逆らっても、必ず流される。それよりも無益な戦いをやめて、家と従業員の生活の安定をはかったほうが、はるかに利口だと考えていたのだ。この時代の目先のきくナンバー２は、みんなそう考えていた。したがって、同じ考えに立つ片倉景綱を名ナンバー２といい、松田憲秀を裏切り者だ、というのは当たらない。その点は、北条氏直もトップとしてよく知っていた。その意味では、北条家の中でも北条氏直はふたつの性格を持っていた。つまり、北条一門という形式的なナンバー2 群を抱える氏直と、松田という実質的なナンバー2 を抱える氏直という、二面性を持っていたのである。だから、このときの氏直は、ふたつに分裂している自分をどうひとつにまとめるかに苦慮したのだ。・・・

「妙策」と信じた裏切り：

　松田の献策によって、北条家は小田原城に籠城と決めたが、ちょっと予想しないことが起こった。それは、豊臣秀吉のほうも気長な攻撃をはじめたことだ。一挙に小田原城に攻めかからなかった。彼は、分散している北条の支城を次次と落とした。そして、小田原城を孤立させた。そうしておいて、大軍をもって小田原城を囲み、そのまま攻撃の手を休めてしまった。攻撃軍は、それぞれ各地から商人や女たちを呼んだ。物や酒を売らせ、また踊りや博打に興じた。なかには付近を耕して、野菜を植えるようなのん気な兵士も出てきた。小田原城内の兵糧が尽きるのを待つという作戦である。小田原城内にも、松田憲秀の意見で、そういう店や、いろいろな娯楽用品が設けられていた。彼は氏直に、「城の各口に配置された兵は、そこだけを守るようにして、ほかの口が攻撃されていても、絶対に応援に行かせないよ

うにしてください。それぞれの分を守るのです。ほかの口が攻撃されていても、よその口は、むしろ将棋でもさしているくらいのゆとりを持たせてください」と進言した。これも変わっている。しかし、その精神をよく理解した氏直は、松田の言に従ったその意味では、このときのトップの氏直は、完全に松田と気持ちを一致させていた。
しかし、豊臣秀吉は、このふたりをそんな次元ではとらえない。あくまでも裏切らせてやろうと考えていた。したがって、しきりに手を伸ばしてきた。次々と使いが松田のところに来た。「秀吉公は、もし攻撃軍の一部を、城の中に引き入れてくれるのなら、あなたに伊豆と相模国を差し上げると申しております」そういう誘いをかけた。松田憲秀は、延々と続く籠城にそろそろ嫌気がさしていた。それというのも、その間にもまだ集まっては、「このまま籠城を続けるべきではない。討って出るべきだ」とか、「いや、このまま籠城を続けるべきだ」と、際限のない論議を繰り返している北条家の幹部に嫌気がさしていたのである。つまり、のちにいう「小田原評定」にあきれていたのだ。その気持ちは、トップの北条氏直も同じだった。ある夜、松田は自分の息子たちを呼んだ。そして、「おれは、豊臣軍に内応しようと考えている」と告げた。長男は、「賛成です。このままでは北条家もジリ貧で、いまにのたれ死にします」と応じた。が、次男は、「そんな武士にあるまじきことはできません。籠城を主張したのは父上ではありませんか。全員が死滅するまでがんばるべきです」
といった。松田は弱ったなと思った。息子たちの意見がこう割れてしまっては困るのだ。そこで、次男を一室に閉じ込めて、内応のしたくにかかった。ところが、この次男が閉じ込められた部屋から脱出して、このことを北条氏政に訴え出た。氏政はびっくりして、松田憲秀とその長男を逮捕した。結果からいえば、松田憲秀の裏切りは失敗したのである。これが豊臣軍に洩れた。・・・
　そして北条氏直は、徳川家康の娘婿だというので命を助けられ、高野山に追放された。一緒に行ったのは北条氏規、氏忠、氏勝たちである。家臣としては、松田憲秀の次男がついていった。数百人の兵が一緒に行ったという。・・
　小田原城に対する豊臣軍の攻撃という未曾有の事態に対して、ナンバー2だった松田憲秀の考えを、彼がそのときにどう評価していたのかわからない。しかし、少なくとも、（おれは、決して間違ってはいなかった）と考えていたことだろう。その意味では、**こういう時期におけるナンバー2としての松田憲秀の意見も、一概に裏切り者であったというわけにはいかない**のだ。